

端午の節句に破邪を願う

天理参考館学芸員

幡鎌 真理 Mari Hatakama

また爽やかな五月が巡ってくる。新年度が始まって少し落ち着き、寒くも暑くもなく、一年の半ばまでまだ少し猶予があるので気持ちに焦りもない。その絶妙な時節に端午の節句がある。しかし元々の端午の節句は、はじめと陰鬱で蒸し暑い梅雨時期の、いかにも流行病が蔓延しそうな「悪月」のものである。端午とは、端^{はし}めの午^{うま}の日のことで、元来五月に限ったものではなかったが、午と五の音が符合することによる同一視と、中国では月と同数の日が重なる「重日」は吉事を行えば吉事が重なり、凶事を行えば凶事が増幅するというスリリングな日であるため、慎重を期して災厄除去をした。まして疫病が流行しやすいこの時期には、なお一層心を込めて穢れを祓ったのである。そのように腹をくくって悪疫に対処しなければならぬ端午には、上巳（はじめの巳の日）のようにうららかに春めいて潮干狩りを楽しむ穏やかさはない。登場する人形も、上巳に飾る愛らしい白いお顔の雛人形などではなく、険しい顔の鍾馗や、鉞を振り上げた真っ赤な金太郎となるのは当然であろう。

端午の節句を「菖蒲の節句」とも言い換えるが、この季節に繁茂するショウブの、剣に似た葉のかたちや強い香気に破邪の効用を信じたからに他ならない。この場合のショウブは、美しい花を咲かせるアヤメ科のハナショウブではなく、ショウブ科のそれである。花は目立たない。推古天皇19年(611)5月5日に大規模な菖蒲が行われたのは、端午に採取した菖草は効能が高いと考えられていたからであろう。天平19年(747)5月5日には聖武天皇が途絶えていた端午節句を復活させ、騎射を天覧するが、このとき「菖蒲御案^{あやめのつくえ}」、「菖蒲鬘^{あやめのかづら}」、「薬玉^{くすたま}」という記述が『続日本紀』に見える。「菖蒲御案」は菖蒲を乗せて運んだ机のことで、「菖蒲鬘」は菖蒲の髪飾りを指し、「薬玉」は菖草を袋に入れて菖蒲を結び

つけて五色の糸を下げたものである。端午節会では菖蒲鬘を男性は冠に、女性は髪に挿して参列して天皇から薬玉を賜うきまりであったため、菖蒲鬘をつけていなければ誰であろうと宮中に入ることはできなかった。さしずめ、現在のコロナワクチン接種証明書やマスク着用がなければ入場お断りということか。このショウブの絶大なパワーを信じて従う考えは平安時代以降も続き、次第に武家や民間も受け入れるようになった。民間でも菖蒲を屋根に葺く「軒菖蒲^{のきしよぶ}」の風習が広まり、ショウブの力で悪疫が家内に入らないよう、当時としてはお墨付きの感染対策を徹底した。

その後、端午の節句に甲冑飾りや五月人形が登場する端緒としてしばしば引用される記述に、二条良基が作者かと推定されている『増鏡』の建長3年(1251)5月5日条がある。ここに「所々より御かぶとの花、くす玉など、いろいろにおほくまいり。朝餉にて、人々これかれ引きまさぐりなどするに」と書かれている。これは武具としての兜に花を挿したのではなく、おそらく薄い木片や紙で作った兜に花を飾ったものか、もしかしたら御かぶとの花=ショウブそのものだったのではないかと思う。天皇が食事をする朝餉の間で、参内した貴族たちが「これかれ引きまさぐり」、あれこれ手にとって眺めたのであろう。端午に武家の象徴ともいえる甲冑を飾ることは公家社会では未だあり得ず、広く甲冑や人形を飾る五月飾りは江戸時代を待たなくてはならない。

江戸時代になると、ショウブに「破邪」の効用に加えて「尚武」の意味合いを強く投影するようになり、さらにそこに男子誕生の祝意が加えられる。『大猷院殿御実記』寛永19年(1642)5月5日条には「けふ家門諸大名より献ずる菖蒲兜を庖所へかざり。旗十五本。白旗五本。白地御紋の旗五本。家門より献ぜられし旗五本。高矢倉の前にたてられる」とある。文章から壮観な有様が想像でき、後に徳川四代将軍となる家綱の初節句がかくも盛大に祝われたことがわかる。ここでも先述の『増鏡』の「朝餉」と同じように、喫食と関係する「庖所」に飾られている。体内にものを入れることに関係する場所にこそ「破邪」が必要と意識されていたのか興味深い。ともかく、このような五月飾りは将軍家や大名のみならず、この頃すでに庶民の間にも広まっていた。なぜなら、これからわずか6年後の慶安元年(1648)には、端午の兜に立派な蒔絵や金具や糸類を用いてはならないとか、幟旗に絹を使ってはならない等の御触書(禁令を示すもの)が出され、奢侈を戒めているからである。

徳川幕府が公儀の祝日として五節句(人日・上巳・端午・七夕・重陽)を定め、そのなかでも特に端午を重視したのは、ショウブの破邪の力と「尚武」に通じること、さらに何より武家にとって跡継ぎとなる男子誕生と健やかな成長が最大の慶事であったからに他ならない。しかしその願いは庶民とて同じ。非情に襲いかかる悪疫や飢饉に加え、容赦の無い自然災害のなか、わが子はなんとか命をつないで無事に育ててほしい、そして願わくば立身出世をして幸せな生活を送ってほしいという思いは庶民こそ強くあったはずである。そのために武具を飾り、勇猛な歴史上の人物をかたどった人形を飾った。新型コロナウイルスの脅威が続くこの時節、端午の節句に甲冑や人形を飾って災厄を祓い、子どもの幸せを祈念する意味に改めて思いを馳せたい。



鯉の上に金太郎 大正14年 全高38cm
(天理参考館蔵)

奈良の旧家から受贈した端午の飾りの一部で京都製。思慮深い表情で鯉にまたがり周囲を睥睨する様子は、このまま龍門を登りきって天空を翔け巡るのように見える。